HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ノダ」に見られる二つの機能
Author(s)	中野, 友理
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 13, 40-57
Issue Date	2009-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45682
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC013_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第13号　(2009) [研究論文]

「ノダ」に見られる二つの機能

中　野　友　理

要　旨

日本語の文末形式「ノダ」の機能について、中野（2009）では、文の命題情報が話者自身の世界知識であると明示することであるとした。しかし、「ノダ」文の中には話者の世界知識ではなく、発話の直前に話者が「発見した」情報を命題として提示するものも存在する。本稿では、話者の世界知識を提示すると思われる「ノダ」と、これに当てはまらず、いわゆる「発見」用法と呼ばれる「ノダ」の関係を明らかにしようとする。

考察の結果、直前に発見したことがらを提示する「ノダ」文は、会話において、聞き手がその情報を知識として保持しているかどうか、話者が想定する必要のない場合に使用される。このような発話は、聞き手への情報伝達という目的よりも、話者がある情報を取得したことを示すものとして、その会話に位置づけられる。また、この「ノダ」文が、話者の世界知識を参照した上での発話であるという点において、話者の世界知識を提示する「ノダ」文と共通点を持つ。以上の点から、「ノダ」は複数の意味機能を持つのではなく、発話に際して話者の世界知識が参照されたことを明示するという単独の意味を持つと本稿では考える。この意味が、「ノダ」が用いられる発話の会話上での位置づけや役割、その際の話者の発話意図に応じて、異なる用法として解釈されるということである。

〔キーワード〕「ノダ」、「発見」用法、既定性、世界知識

1. はじめに

日本語の文末に用いられる「ノダ」は、形式的に言えば「ノ」によって文を名詞化し、名詞述語文を成立させるものである。しかし、その機能となると、形態統語論及び意味論の範疇では実際の用法を十分に説明できず、その形式が使用される際の文脈も考慮した語用論の枠組みが有効であろう

ことは既に指摘されているところである。本稿では、これまでの「ノダ」研究では決して主要なものとされてこなかった用法について、それらが用いられる文脈を考慮した上で、「ノダ」の機能全体における位置づけを明らかにしたい。

「ノダ」の用法の多様性（庵他2000）、または「ノダ」が複数の意味機能を持つ（野田1997）ことは、これまでにもしばしば述べられてきた。本稿でも、以下の考察では「ノダ」に二つの用法を設定することになるが、果たしてこの二つの用法が、(1)「ノダ」の持つ複数の意味として個別に設定すべきものか、(2)主要な意味と、そこから拡張的に発生する意味という階層関係を持つのか、(3)それぞれがある単独の意味から発生する用法なのか、または上記以外の説明が可能であるかを検証する。「ノダ」の二つの用法について、まずはその相違点と共通点を指摘することで、「ノダ」における二つの用法の位置づけを試みる。

以下では、まず第二章で先行研究における「ノダ」の機能を紹介し、これに当てはまらない「ノダ」の用法を第三章で取り上げる。先行研究では主要な用法とされることの少ない、いわゆる「発見」の用法について、その特徴を明らかにするために、他の用法との相違点及び共通点を考察する。第四章では第三章での考察結果をまとめ、論者なりの意味づけを行う。最後に、第五章で今後の展望と課題を示す。

2. 「ノダ」の機能　－先行研究から

本章では、既に先行研究において指摘されている「ノダ」の意味機能を紹介する。中野（2009）では、「ノダ」の機能の一つとして「命題情報が話者の長期記憶に保持されていることを明示する。」(p.217) と提案した。このうちの「長期記憶」とは、加藤（2008）の記憶モデルに従った用語である。加藤（2008）では、ある会話がなされる際に、その会話の参与者が取得、保持する記憶を保持期間などをもとに分類している。そのうち、会話セッションが継続している間のみ参与者によって保持されるものを談話記憶と呼び、これに対して「セッション開始前から会話参加者が持っている知識で、場面に影響されないもの」(p.51) を長期記憶と呼ぶ。

本稿では、中野（2009）で用いた「長期記憶」という用語が心理学における定義を連想させるという理由から、これを「世界知識」と置き換える。ここでの世界知識とは、特定の会話の終了によって消去されることのない、

個々人の生きる世界に存する様々な事象についての記憶情報を指す。この内には、同じ世界に存在する多くの人間と共有された一般常識、文化的及び社会的慣習から、他人とほとんど共有され得ない個人的な情報まで、種類も他者との共有度も異なる情報が含まれている。また世界知識には、常に談話記憶からの情報が移行されることで追加や修正が繰り返され、逆に外部から情報を取得、処理する際には、世界知識の一部が必要に応じて活性化、参照される。

上記に基づき、中野（2009）の「ノダ」の定義を以下のように置き換えて再提示する。

(1)　「ノダ」の意味
　　文の命題情報が話者の世界知識であることを明示する。

中野（2009）での提案は、それ以前の「ノダ」研究で繰り返し指摘されてきた「既定性」について、記憶モデルの観点から再考したものである。つまり、基本的には三上（1953）や国広（1992）などによる主張に従うところが多いといえる。

一方で、「既定性」や、(1)で提示した「ノダ」の意味では説明できない例も存在する。

(2)a．（なくしたと思っていた傘を見つけたとき）なんだ、こんなところにあったんだ。(庵他2000：273)
　b．【天気予報を見ながら】あれ、明日雨なんだ。[1)]

(2a)の話者は、発話直前に傘の在り処という情報を得ている。したがって、この命題情報は話者の世界知識とは言えず、(1)では(2a)の「ノダ」例を説明できない。仮に「既定性」が現実世界において既に成立した事態であることを示す性質であれば、(2a)の「ノダ」文は既定性を有するということもできるが、(2b)については(1)でも「既定性」でも説明不可能となる。(2)のような「ノダ」の使用は、庵他（2000）において「発見」用法と呼ばれている。次章では、「既定性」や(1)の「ノダ」の意味では説明できない、いわゆる「ノダ」の「発見」用法について考察する。[2)]

3. いわゆる「発見のノダ」について

本章では(2)のような、(1)の「ノダ」の意味では説明できず、また既定性を有するとも言い難い「ノダ」の例、その中で「発見」用法と呼ばれるものについて詳しく考察する。以下では便宜上、(1)に当てはまる「ノダ」例を「ノダ①」とし、(2)で挙げたような「発見」用法と言われる例を「ノダ②」として分けるが、あくまで以下で行う分析のための便宜的な分類である。3.1.では、まず最初に「ノダ①」とは異なる「ノダ②」の特徴を明らかにし、続く3.2.で「ノダ①」と「ノダ②」が共有する特徴について考察する。

3.1. 「ノダ②」の特徴 －「ノダ①」との相違点

ここでは「ノダ②」文の特徴を明らかにすることを目的とし、まず「ノダ①」との相違点から指摘していきたい。以下で主に二点について考察する。一つは、「ノダ」文の話者が、発話時に聞き手の知識をどのように想定しているかという点である。もう一つは、話者がどのような意図をもって「ノダ」を伴った発話を行うかという点である。

3.1.1. 話者による聞き手の知識の想定

話者による聞き手の知識の想定という点から、二つの「ノダ」を比較する。まず「ノダ①」の使用に際し、話者が聞き手の知識をどう想定しているかを考える。「ノダ①」文の話者は、その文命題について聞き手が知らない（または、知っていても発話時には意識していない）と想定しており、聞き手にこの情報を伝えよう（または思い出させよう）としていると言えそうである。例えば(3)の話者は、聞き手が「ノダ」文の命題情報（「話者は昨日頭が痛かったこと」）を知らないものと想定し、「ノダ」文を発話することでこの情報を聞き手に伝えている。

(3) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。(庵他2000：270)

「ノダ」文の発話に際し、その命題について聞き手には知識がないと話者が想定しているということは、田野村（1990）や野田（1997）において指摘されている。田野村（1990）では「ノダ」の意味特性の一つとして「披瀝性」が挙げられており、これによると「ノダ」は、「聞き手の知らない

ことがら、さらに言えば、単に知らないだけではなく、聞き手にとっては容易に知り得ない種類のことがらを表現するのに用いられることが多い」（p.34）としている。また野田（1997）における対人的ムードの「ノダ」には、「聞き手が認識していないことを教えよう、知らせようという、話し手の聞き手に対する心的態度を表す」（p.92）機能があるという。しかし、「披瀝性」を持つ「ノダ」文に限らず（さらには「ノダ」を伴う発話に限らないと思われるが）、多くの発話において話者は、聞き手が存在すればその相手の知識を予め想定し、相手が知らないか、あるいはその時点で意識していないと思われる情報を提示しようとすると言えるだろう[3]。(4a,b)は、「披瀝性」の例ほど聞き手の知り得ない種類の内容ではないものの、聞き手が知らない、または意識していないだろうと話者が想定する事態を伝えている。(4c,d)は野田（1997）における「スコープ」を表す「ノダ」であるが、これらにも同じことが言えるだろう。

(4)a．おまえにそんなことを言う資格はないんだ。（田野村1990：40）
　b．こどもがどうしてもピアノを習わせてくれと言ったんです。
（田野村1990：46）
　c．「それ、買ったんですか」
　「いえ、買ったんじゃありませんよ。借りたんです」
（野田1997：50）
　d．私が山田さんに電話したんじゃありません。（野田1997：56）

これに対して「ノダ②」文の使用では、命題情報を聞き手が知識として既に保持するかどうか、話者が発話時に想定しない例が観察される。このことが明白なのは、「ノダ②」が独り言で用いられる場合である。

(5)a．あんなに喜んでいる。よほど嬉しいんだ。（田野村1990：22）
　b．（友人の部屋に本棚が五つあるのを見て、独話で）
　「本、たくさん読んでるんだ（なあ）」（野田1997：73）
　c．【大型ショッピングセンター。手芸品売り場が見つからず、帰ろうと出入口付近まで来たところ、視界に「手芸品」の文字が入る。】
　なんだ、ここにあったんだ。

(5)の「ノダ」文の命題は、どれも話者の世界知識とはいえないため、本稿における「ノダ②」の例といえる。これらは聞き手がいなくても成立する発話であり、したがって発話の際に話者が聞き手の知識を想定することはない。

次に、会話における「ノダ②」の使用を見てみよう。(6)の「ノダ」文の話者Bは、自身の発話内容について聞き手Aが知っているかどうか想定する必要はない。なぜなら、そもそも「ノダ」文の発話内容が、Aの先行発話によってBへと伝えられたものであり、Aがこの情報を既知であることはAとB双方にとって明白だからである。(7)も、「ノダ」文の内容は聞き手Aによる先行発話を繰り返したものである上に、それはAの娘の年齢である。「ノダ」文の話者Bにとって、Aが「ノダ」文の命題情報を知らないと想定する根拠は全くない。

(6) 【電話での会話。AとBは別の町に住む。】
A： こっちはもう雪つもってるよ。
B： つもってるんだ。

(7) 【Aと久しぶりに会ったBが、Aが連れている娘の年齢を尋ねる】
B： 大きくなったねえ。二歳だっけ？
A： 三歳です。
B： 三歳なんだ。

また(8)の「ノダ」文の命題内容は先行発話（「Cがお盆に旭川に帰っていた」）の前提として導き出せる情報である。(8B)は、聞き手Aが「ノダ」文の情報を既に知識として保持するとみなしているであろう。[4)]

(8) A： Cさん、お盆は旭川に帰ってたらしいよ。
B： Cさんって旭川出身なんだ。

以上の例からわかるように、「ノダ②」文の話者は発話に際し、聞き手が命題情報について知識がないとは想定していない。それは、(5)のように聞き手自体が存在しないか、(6)-(8)のように聞き手が「ノダ」文の命題情報について既知であることが、「ノダ」の話者にとって明らかな状況だからである。

以上の例とは異なり、「ノダ②」文の発話に際しても、聞き手が存在し、かつ聞き手がその命題情報について知らないという発話状況は考えられる。

(9)　【逃亡中だった殺人事件の容疑者が捕まったというニュース速報を見て】
　　A：　あ、容疑者捕まったんだ。
　　B：　ホントだ。

(9)のBは、「ノダ」文の命題情報についてAとの会話以前には知らなかったと考えられる点で、(6)-(8)の例とは異なる。しかし、(9)が本節での考察に全く反する例とはいえない。まず、(9A)の発話は聞き手Bが存在せずとも、またBが「ノダ」文の情報について既知であるとAがみなしていようとも発話されて差し支えない。つまり(9A)は、当該情報を知らないBに、発話によってその情報を伝えようという意図があるとはいえないのである。((9)では、AがBと対面する位置でBに向かって発話しているとも思われない。)

(9A)がBに対する発話であることを明白にするために、(10)のように「ネ」「ヨ」など終助詞を用いることもできる。但し、神尾（2002）の「情報のなわ張り理論」によると、(10a)のように「ネ」を伴った文の話者は、発話時に聞き手がその情報を知っていると想定しているということである。他方、(10b)のように「ヨ」が用いられた場合、話者は、聞き手が当該情報を知らないと想定していると思われるが、この場合「ノダ」文の使用には不自然さが伴う。

(10)　【(9)と同じ状況で】
　　a．A：　あ、容疑者捕まったんだね。
　　b．A：　あ、容疑者 ¦?捕まったんだよ／捕まったよ¦。

(9)及び(10)の例からも、「ノダ②」の話者は、聞き手が「ノダ」文の情報を知らないと想定しているとは言えず、仮に聞き手が当該情報を知らないとしても、話者がその情報を聞き手に伝えようという発話意図はないように思われる。「ノダ②」における話者の発話意図については、次節でより詳

しく考察する。

3.1.2. 「ノダ②」を伴う発話の意図

3.1.1において、「ノダ②」は、聞き手のいない発話場面や、「ノダ」文の命題を聞き手が知識として既に保持することが明らかだと話者がみなしている発話場面で用いられ、その点で「ノダ①」との相違があった。つまり話者が「ノダ②」文を発話する目的とは、聞き手が知らないと想定される情報を伝達することではない。「ノダ②」の文はどのような意図をもって発話されるのか。そこで以下では、「ノダ②」文が発話される際の話者の意図について、「ノダ①」との相違点を考察する。

まず独り言における「ノダ②」の発話意図については、名嶋（2001）で述べられているように、話者が新たに得た解釈に「自己の思考体系を定着させるべく自らを「納得させる」という命題態度で発話する」(p.12) という考え方がある。話者が自らをどの程度客体化して捉えられるかという点で、上記の説明には疑問もあるが、この検証は非常に困難である。ここでは、独り言における「ノダ」文の発話意図についてこれ以上は考察せず、会話での、特に(6)、(7)及び(8)で扱ったような「ノダ②」の使用における話者の意図を考える。このうち(7)を(11)として再提示し、さらに詳しく考察しよう。

(11)　((7)の再掲)
　　B：　大きくなったねえ。二歳だっけ？
　　A：　三歳です。
　　B：　三歳なんだ。

(11B)は、聞き手が先行して提示した情報を、なぜ「ノダ②」とともに会話に再提示するのか。考えられるのは、「ノダ②」の話者Bが、Aによる先行発話からの情報を確かに取得したとことを示すという目的である。(11)の「ノダ」文の命題内容は、Aによる先行発話と同じである。仮にBが先行発話の情報を「ノダ」を伴わずにそのまま繰り返した場合、BがAによる先行発話から情報を得たという含みは(11)ほど感じられず、例えばAの娘の名札に年齢が記されていた等、別の情報源による情報を表明したようでもある。つまり、(12B)の応答は(11B)のそれに比べて、Aによる先行

発話からの情報を自分の知識として確かに取得したということをはっきり示さないのである。

⑿　B：　大きくなったねえ。二歳だっけ？
　　A：　三歳です。
　　B：　三歳だ。[5]

(11B)は、Aが伝えようとした情報を確かに取得したと示すために、その情報を「ノダ」とともに再提示したと考えることができる。ある情報を取得したということは、その情報から導かれる前提や推論情報を提示することでも示すことができる。但し⒀で見られるように、取得情報からの前提や推論情報を提示する場合、「ノダ」の付与は任意である。(13B)は、「Aの娘が三歳である」という取得情報から推論される情報を提示し、Aに同意を求めることで、元となる情報がBによって確かに取得されたことも示す。この場合、「ノダ」がなくても自然である。

⒀　B：　大きくなったねえ。二歳だっけ？
　　A：　三歳です。
　　B：　じゃあ、もう結構｜しゃべるね／しゃべるんだ（ね）｜[6]。

「ノカ？」や「ノ？」を用いた場合では、その形式の持つ疑問という意味での使用よりも、話者が取得した情報を聞き手に確認するという意図があると解釈できる。

⒁　【ケーキを差し出しながら】
　　A：　　これ、主人が作ったケーキ。
　　B１：　ご主人が作ったんですか？おいしそう！いただきます。
　　B２：　?ご主人が作りましたか？おいしそう！いただきます。

(14B２)のように「ノダ」がない文では、話者が先行発話の情報に疑問があることを示し、後続文とのつながりが不自然になる。一方で(14B１)の「ノダ②」の使用に不自然さは感じられない。[7]

さらに⒂のように、話者にも聞き手にも明白な事態が、「ノダ」を伴っ

た疑問文によって提示されることがある。この場合「ノダ」がないと、話者と聞き手双方に明らかなことの真偽を問うことになって不自然である。

(15)　【紙に絵を描いているBに対して】
　　A1：　絵描いてるんですか？
　　A2：??絵描いてますか？

(15A1)は、聞き手に「絵を描いているかどうか」という字義通りの内容を尋ねるのではなく、話者が得た聞き手についての情報を確認し、さらにその理由や目的を知ろうとする意図もここではあると思われる。しかし、「どうして絵を描いていますか？」と直接理由を尋ねるよりも、(15)のような「ノダ②」による質問のほうが、聞き手に、絵を描いている経緯について話すのを回避する余地を与えられるので、ポライトネスをより考慮した発話といえる。

以上の例から、「ノダ②」を用いる話者の意図とは、話者がある情報を取得したことを示すこと、さらにその疑問形では自身の取得情報を聞き手に確認することにあると考えられる。

3.2.　二つの「ノダ」の共通点

前節では「ノダ②」の特徴として、話者による聞き手の知識の想定、また「ノダ②」を伴う発話における話者の意図について、「ノダ①」と異なる点が見られることを述べた。ここでは、二つの「ノダ」に共通する特徴があるかを確認していく。(1)は、「ノダ」という言語形式の使用によって、話者が命題情報をどのように保持するか、つまり話者の情報管理の状態を明示することを述べているが、「ノダ②」の使用にも、話者の情報管理の明示という「ノダ①」と共通する機能があるだろうか。

これまでの例からもわかるとおり、「ノダ②」文の命題として提示されるのは、発話がなされる直前に話者が取得した情報である。例えば(11)ではAの娘が三歳であること、また(8)ではCが旭川出身であることが、話者の新たに取得した情報であり、どちらも「ノダ②」を伴って発話されている。しかし、取得された新情報が常に「ノダ」を伴って発話されるわけではない。

(16) a．【空にかかる虹を見つけて】あ、虹だ！

a’ ?あ、虹なんだ！

b．【足の不自由なクララがゆっくり立ち上がるのを見たハイジの発話】　クララが立った！

b’ ?クララが立ったんだ！

(16)のような情報取得の際に、「ノダ」を伴った発話は不自然である。話者が取得した情報に「ノダ②」が伴う場合と伴わない場合では、どのような違いがあるか。

上記の問題について、「ノダ①」と同じく、話者の世界知識に関連して考察しよう。すると「ノダ②」の使用の際には、話者が新情報の取得時に、この情報に関する自身の世界知識を参照したと考えることができる。例えば(8B)は、情報取得に際して自身が既に持つCの知識を参照し、そこになかった新たな情報を追加、更新するという過程を考えることができる。新情報の取得に伴う既存の知識の参照と、その更新という情報処理過程の有無が、「ノダ②」の使用に影響するのではないだろうか。

これを検証するために以下の例を考えてみよう。(17)は、(8)と同じ状況だが、この会話以前にBが「Cは東京出身だ」と思いこんでいたとする。すると、「ノダ」を用いないB２の発話は不自然になる。

(17)　A：　Cさん、お盆は旭川に帰ってたらしいよ。

B１：　Cさんって東京出身じゃないんだ。(旭川出身なんだ。)

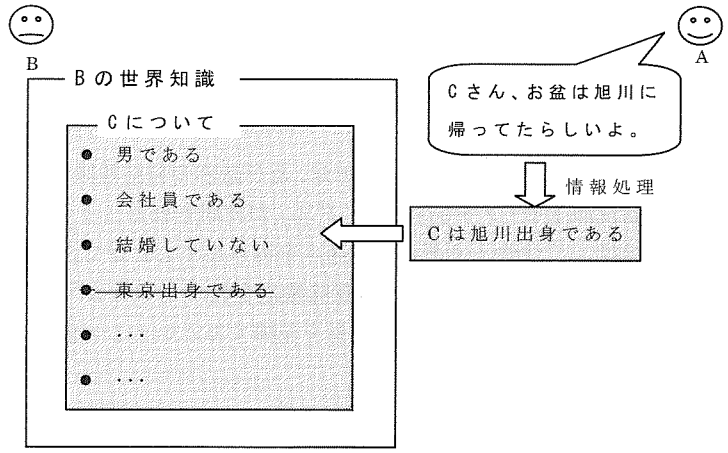
B２：?Cさんって東京出身じゃない。(旭川出身だ。)

(17A)の発話はBに「Cが旭川出身であること」を前提情報として導かせるとしても、「Cが東京出身ではない」という、Cと旭川以外の地域との関係を導くことは通常ありえない。明らかに、Bの保持していた「Cについて知識」内には、東京という地域に関する情報が既にあったことが、(17B１)の「ノダ②」を伴った発話ではわかるが、一方で「ノダ」のない(17B2)では、Bが既に保持していた知識内容までを含意せず、不自然さを生じさせる。

(17B)の知識変化の過程は、以下の図のように表せそうである。つまり、Aの発話（またはそれ以前にCが会話の話題となった時点）でBは、Cに

ついての自身の知識を活性化させる。Aの発話から新たな情報を取得するのに伴い、Cの出身地についての知識が参照され、これまでの知識が必要に応じて修正されると、修正後の出身地情報は会話終了後も話者の知識として保持される。

図　⑭におけるB1の世界知識の変化



※　矢印はBの情報取得の過程、網掛け部分は活性化されたBの知識を表す。

(16b)と同様の状況における⑱の発話でも、同じ説明が可能であろう。⑱の話者は、「クララが立った」という視覚情報を外的状況から得るが、この段階における新情報の言語化で「ノダ」が用いられないことは既に(16b)で確認した。しかし、この視覚情報の取得に伴い、話者はクララについての知識にアクセスし、「足が悪くて立つことができない」という既存の一属性が参照される。これが新たに取得された情報と置き換えられ、更新された場合に「ノダ②」が用いられる。⑱が、「クララが立った」という外的事態の描写ではなく、「立てる」というクララの属性を表すことに注意したい。つまり、「ノダ」文で表されるのは、ある情報の取得に際し、話者が既に持っていた知識を参照し、それを更新したことで、新たな情報が話者によって知識化されたという一連の情報処理が行われたことであると考えられる[8)]。

(18) 【足の不自由なクララがゆっくり立ち上がるのを見て】

a. クララ、立てるんだ！

b. ?クララ、立てる！

以上から、「ノダ①」と「ノダ②」の使用における共通点は、どちらも発話に際して話者の持つ世界知識が参照されていなければならないという点であるといえる。つまり、「ノダ①」の発話においては、話者の世界知識が聞き手に提示されることが表明されており、「ノダ②」では話者の世界知識が参照され、新たに取得した情報によってこの知識が更新されたことを示すのである。

3.1.では、話者による聞き手の知識想定、及び話者の発話意図において、異なる発話状況の下で「ノダ①」と「ノダ②」が使用されることを述べた。さらに本節では、二つの「ノダ」に共通点を導き出すことができた。これにより、「ノダ」という形式が二つの意味機能を持つというよりも、一つの意味機能が異なる状況でそれぞれ効果を発揮するといえる可能性が出てきたことになる。

4. まとめ －二つの「ノダ」の関係

前章では、「発見」用法と呼ばれる「ノダ②」について、「ノダ①」との相違点と共通点を比較することでその特徴を明らかにすることを試み、結果として以下の点を指摘した。

表 「ノダ①」と「ノダ②」を伴う文の特徴

	命題内容	話者による聞き手の知識の想定	「ノダ」使用における話者の意図
「ノダ①」を伴う文	話者が当該会話以前より保持する世界知識	聞き手には命題情報についての知識がない、また活性化されていない	命題情報が話者の世界知識であることの明示 聞き手への情報伝達
「ノダ②」を伴う文	発話の直前に取得した（または推論して得た）情報	聞き手がいない、または聞き手にとって命題情報が既知であることが明らかで、想定の必要がない	命題情報が取得されたこと、またその際に話者が既に持つ知識を参照したことの明示

以上から、「ノダ②」は「ノダ①」のように話者の世界知識を命題として提示しておらず、本稿(1)の定義には該当しないが、「ノダ②」文の発話の際に話者の世界知識が参照されている点では、「ノダ①」と特徴を共有する。

本章では、なぜ「ノダ」に二つの用法が見られるのかということについて考える。この点について論者は、そもそも会話という活動をその参与者が協同して構成していく上で、二つ（または二つ以上）の主要な作業が行われており、それが一つの言語形式に複数の機能役割を与えるのではないかと予想する。会話を構成する二つの作業とは、一つが参与者間の情報のやり取りである。そしてもう一つが、情報のやり取りに伴って変化する、各参与者の知識状態の表明である。

このうち前者は、従来から会話の意義として広く認められており、Grice（1975）の「協調の原理」などは、情報を提示する側と取得する側が遵守すべき基本的原則を示したもの、つまり情報のやり取りという作業の存在が考慮されたものである。一方後者は、個々人の知識状態やその変化の過程を示すことが（(6)や(7)での会話のように、参与者間で同様の情報を提示しあうことになれば)、時に会話を冗長させる原因に見え、情報のやり取りとしては合理的な行動とは言えないものである。しかし実際は、この作業が無駄のない情報のやり取りを支えるともいえるし、何よりも会話参与者はこの作業によって、会話の進行にともない相手との共有知識が徐々に増えることを確認できる。会話の重要な目的である「知識の共有」の達成を最もはっきり実感できる、参与者にとって好ましい作業と位置づけできるのではないだろうか。

会話という共同活動が少なくとも上記の二つの作業によって成り立つと考えると、「ノダ」の使用においても、その形式自体の持つ意味が二つの異なる作業のもとで異なる役割を担うのではないかと予想できる。つまり、異なる特徴を見せる二つの「ノダ」は、話者が、形式自体の有する意味性質を会話内の各作業内容に従って使い分けた結果、生じるものと考えられる。

本稿では、タイトルこそ『「ノダ」に見られる二つの機能』としたが、結論として「ノダ」という形式の持つ意味は一つであり、会話の各場面で行われる作業の意味目的、それぞれの状況における話者の発話意図が複数あることで、一つの意味から異なる用法が確認されると考えることができ

る。以上、ここでは第三章における二つの「ノダ」用法の考察について、会話という活動を構成する複数の作業を設定することで、論者なりの意味づけを行った。

5. 今後の課題

本稿では、「ノダ」にみられる二つの機能の関係について考察してきた。その結果、形式の持つ単独の意味が、会話の各場面で行われる作業、またその作業目的に従って変化する話者の発話意図のもとで、結果的に複数の用法を見せるのではないかという結論に至った。ただし、ここでの結論は論者による予想の域を出ていない。今後、同じような分析が複数の用法を持つ他の言語形式（特にモダリティ形式）にも可能であることが明らかになれば、本稿での考察の裏づけとなろう。

さらに第四章で提案した、会話を構成する二つの作業についても、更なる考察の余地がある。論者自身、本稿に示した二つに加え、別の作業も設定できるのではないかと考えている。例えばその一つとして、聞き手に対する「行為の要求」などは、情報のやり取りなどとは独立した作業として設定できるだろう。このように上記の二つの作業とは別の作業が会話を構成する重要な役割を担っているとすれば、「ノダ」においても別の用法が設定できることになるが、さらなる考察は今後の課題とし、ここでは言及するのみにとどめる[9]。

注：

1）本稿で提示する用例のうち、出典の記載がないものは論者による作例とする。

2）中野（2009）における「ノダ」の機能の提案は、「ノダ」及びその異なる文体形式である「ンダ」「ノデス」「ンデス」「ノ」など、平叙文の文末に用いられる諸形式に対象を限定してなされたものである。したがって本稿においても平叙文の文末に用いられる「ノダ」とその文体的異形式を主な考察対象とし、必要に応じて疑問形（「ノカ？」、「ノ？」等）についても言及する。

3）したがって、聞き手に保持されていないと想定される知識を話者が発話によって聞き手に伝えようとすることが、「ノダ」だけの持つ意味機能とは言えない。

4）(8B)は、Aの発話から「Cが旭川出身である」という前提を導き、Aにも当然この知識があるとみなすと思われるが、この情報が真ではない、またはAが知識として保持していないことも実際はあり得る。以下の会話を参照されたい。

i）A：Cさん、お盆は旭川に帰ってたらしいよ。
　B：Cさんって旭川出身なんだ。
　A：いや、旭川出身ではないんじゃない？去年ご両親が引っ越して、今は旭川にいるって言ってたから。

5）尚、「三歳か」という発話であれば、話者BがAの発話から情報を受信したという含みが感じられる。これは「カ」が持つ「ある状況を発見し、納得したことを表す用法」(庵他2001：261) に当たると思われる。また、(11)の「ノダ」は「ノカ」(下降調) にも置き換えられるが、これも上記の「カ」の用法が「ノダ」に付されたものと考えることができる。さらに、この「ノカ」(下降調) が「ノダ②」の多くの例と同様の状況で用いられるということは、話者が当該情報を確かに取得したということを示す意図が「ノダ②」の使用にあるという本稿の考察を支持するものである。

6）(13)では「じゃあ」という表現からも、Bが取得した情報からさらなる推論情報を導いていることが表れている。

7）「ノダ」のない疑問文では、相手が発話した文や語そのものの意味について疑問を示すことができるのに対し、「ノカ？」「ノ？」では不可能である。

ii）A：　中西さん、草食系男子だからね。
　B1：草食系？「草食系」ってどんな人？
　B2：??草食系なの？「草食系」ってどんな人？

つまり「ノダ」の疑問形には、通常の疑問形が持つ文意味や語義についての問いを明示する機能がないということである。

8）なお、本節の考察は、名嶋（2007）における説明とも共通する点がある。名嶋（2007）では、関連性理論に基づき、話者がある状況から得た想定Pを、自身の持つ文脈Cと結びつけることで、話者の文脈が改変されたことが「ノダ」によって表されるとしている。名嶋（2007）

における「話者自身の持つ文脈」とは、本稿でいう話者の世界知識に、この場合共通するところがある。但し、名嶋（2007）では「既定性」が「ノダ」の本質とはみなされていない。

9）例えば「行為の要求」が会話を構成する一作業として設定できるのであれば、いわゆる「命令のノダ」（庵他2001：290を参照）を「発見」用法と並立して位置づけられると論者は考えるが、さらなる検討が必要である。

参考文献：

庵　功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵　功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

加藤重広（2008）「文脈とはどのようなものか」『日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研究』平成17-19年度科学研究費補助金　基盤研究(C)報告書 pp.45-58

神尾昭雄（2002）『続・情報のなわ張り理論』大修館書店

国広哲弥（1992）「「のだ」から「のに」・「ので」へ－「の」の共通性」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp.17-34

田野村忠温（1990）（再刊2002）『現代日本語の文法Ⅰ－「のだ」の意味と用法』和泉書院

中野友理（2009）「「ノダ」の既定性－記憶モデルの観点から－」『日本認知言語学会論文集』第9巻 pp.214-224

名嶋義直（2001）「「発見のノダ」再考」日本語用論学会『語用論研究』第三号pp.1-15

名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能－関連性理論の観点から－』くろしお出版

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

三上　章（1953）『現代語法序説』乃江書院（くろしお出版復刊 1972）

Grice, H. P.（1975）"Logic and conversation". In Cole, P. and Morgan. J. L.(eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, pp.41-57. Academic Press.

なかの　ゆり（留学生センター非常勤講師）

Journal of the International Student Center Hokkaido University No.13 (2009)

Two Usages in *No-da*

NAKANO, Yuri

This paper aims to clarify the relationship between two usages of the Japanese *no-da* sentence. Japanese *no-da* supposedly offers the speaker's knowledge to the listener and provides new information or reminds the listener of him or her knowledge. This usage represents *no-da*'s main function. A second usage is often observed in conversation. This *no-da* sentence provides new information that the speaker has just gathered from the context of the conversation.

The question is whether *no-da* has two meanings or one. We conclude that each of the two different usages is used in different conversational contexts. One is used when the speaker does not need to assume that the listener knows about the information provided by the *no-da* sentence. Such utterance with *no-da* is supposed to establish that the speaker has acquired information from the context, more than to exchange information between the speaker and listener. The common point of the two usages is that speaker's knowledge is referred to in the process of information processing. We therefore consider that *no-da* has just one meaning, which is to indicate that speaker's knowledge has been referred to in the utterances. This meaning shows different functions in different conversational situations.